

出葉屋の婆・隠岐郡知夫村多沢

令和2年10月13日掲載予定

収録・解説・酒井 董美^{たむら} イラスト・福本 隆男語り手 小泉ハナさん（明治26年生まれ）
収録・昭和50年6月4日

あらすじ

昔。ある侍が夜中に峠を通つたら、イノシシが四匹も寄つて、子を産んでいる。：ここのうおもしろい見物はないわい。：侍がそれを見物して、里へ下つて宿屋でその話をしたら、宿屋の人が、「今夜はおまえは命はないぞ。悪いものを見て、：、それで宿貸さん」と言う。驚いた侍は、「おまえたちや出ておつて、今夜一晩、家を貸してくれ」と頼み、独り残つて二階への梯子を引き上げて待つていた。イノシシが千匹も来て、侍はおらぬかと戸棚から縁の下から、どこもかしこも捜す。いくら侍を捜しても、下には姿が見えない。「見えん」。今夜は二階だも知らん」。そう言つて、イノシシたちは肩車をして二階へ上がったところ、相手は侍だったから刀でイノシシをストツと斬り、ストツと斬りする。イノシシもかなわないの

で、「明日の晩は出葉屋の婆に、かたきをとつてもらおうだけん」と逃げてしまった。朝、その家の主人がもどつて来て、「どうした」と聞いたから、「こう言うわけ、もう一晩、宿貸せ。自分は、どけだり行かれせん」と言う。「もう一晩承知してあげけん」と主人も承知した。その晩、侍が構えておつたら、出葉屋の婆が、髪を振り乱し火の玉になって来た。侍は、その火の玉を刀でスパツと突くと、ちょうど婆の顔のまんな中を突いたことになった。婆は急いで逃げたのだった。夜が明けると家族が帰つて来た。「どうした」「ゆんべ、出葉屋の婆が火の玉になって来て、一ツ突いてやったら、こつたりだり言わん」。

侍は「今日出葉屋の婆を訪ねて行く」と言つて、出葉屋の家を訪ねて行った。そこはお寺だった。「出葉屋の婆さんとこかいの」「ここだ」。婆さんに会いたあて来た。会わせてこせ」「ゆんべは、この婆さんは小便をしに行くてつて転んで、起きられせぬ。会わせられもせぬで」「自分で行くから会わせてこ

せ」と侍は、自分で勝手に部屋に入つて行った。そして婆を見るなり刀でその婆の首を斬り落としてしまった。寺の坊さんたちが、「人殺しだ、ねえけん、騒ぐことやめちよつてこせ」といくら言つても人々が聞かない。「頼むけん、二十四時の間、捨てちよけん」と捨ておかせた。そうしたら、婆の死骸は大きな牛の子ほどもある猫になった。人々が、婆の部屋の座の下を見たら、本当の婆さんたちの骨がいっぱいあった。古猫が化けて婆さんたちを取つて噛んで座の下にその骨を入れていたのだった。

解説

語り手は実に元気のよい語り口で、聞いている者の関心であつた。稲田浩二「日本昔話通観」によれば、「むかし語り」の「厄難克服」の中の「賢さと愚かさ」に「鍛冶屋の婆」として分類されている有名な昔話なのである。
(元島根大学法文学部教授)



https://kanbenosato.com/minwa/kancho_200709.html